

平成 27 年度 学校自己評価システムシート

(大妻嵐山中学校・高等学校)

目指す学校像	○Global Eco Science School ○建学の精神「学芸を修めて人類のために」貢献できる高い意識と学力を身につけた女性を育成する学校 ○大妻コタカ先生の教育理念に基づいた人格の陶冶をめざす学校	※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。	出席者 第三者評価委員 4名 学校関係者評価委員 3名 事務局(教職員) 8名
重点目標	1 世界につながる科学的素養を育てる 2 世界につながる表現する力を育てる 3 世界につながる心と感性を育てる 4 世界につながる進学力を育てる 5 組織的な広報活動を展開し学校の魅力を伝え、入学者を確保する	達成度 Aほぼ達成 (80%以上) B概ね達成 (60%以上) C変化の兆し(40%以上) D不十分 (40%以下)	

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する)は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学 校 自 己 評 価						学校関係者評価		
年 度 目 標				年 度 評 価		実施日 平成28年3月5日		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1・2	＊世界につながる科学的素養を育てる ＊世界につながる表現する力を育てる ○学校経営計画の理解と浸透を図る必要がある ○授業の質をさらに向上させる必要がある。 ○自学自習力を育成し生徒の家庭学習時間を増加させる必要がある。	○教科指導の質の向上 ○家庭学習時間の増加 ○客観テストの学力の向上	○教科学力向上の基盤プラットフォームの確立 ○英語教育見直しと充実 ○英語授業の見直し、英検・GTEC・読解力テスト・TOEIC等に挑戦させる。 ○教科主任会・学年主任会等の連携により学力向上の取り組みを組織的に展開する。 ○管理職による授業観察・公開授業を実施し授業改善を行う。 ○授業相互見学と協議会を行うなど教科マネジメントを確立し、授業力を組織的に向上させる。 ○中学校において定期的な学力アセスメントを実施するとともに、ベネッセの研究協力校として、全生徒個人成績変移カルテを作成し個々人の学習に対する指導ができる体制を構築する。	○英検の取得率が向上したか。 ○中学生の英語力が客観テストで向上したか ○生徒による授業評価が向上したか。 ○家庭学習時間を増やすことができたか。	○各教科で教科学力向上を目指したプラットフォームを作成し、基礎学力の向上の視点で授業を展開する基盤の確認ができた。特に英語科では大東文化大学静氏の指導協力を受け、特に4技能のうちリスニング、スピーキングに重点を置いた授業研究を進め、他教科の先導的な取り組みを行い、授業改革に取り組んだ。 ○家庭学習時間の向上への取り組みや自学自習力の向上への取り組みにまだ課題があるため、客観テストの学力の向上にまで成果が現れていない。ただし、中学校1年生では定期的な基礎学力アセスメントを実施し、生徒の学力向上の状況を細かく把握し、学力状況に応じた授業を行うことができ、本校独自の基礎学力の向上策とすることができた。	B	○中学校、高等学校とも生徒の学力の現状をさらに的確に把握し、学校としての基礎学力向上策を推進する必要がある。また2020年を目途とした大学入試改革をも見据え、中期経営計画でも明らかにした、これからの時代に生きる生徒たちが身につけるべき力を確実に身につけさせるための授業力向上に取り組む。そのためには今年度設定した具体的方策を来年度も着実に取り組む。	学校関係者からの意見・要望・評価等 ○学力の向上について指導方法の工夫改善を図る必要がある。 ○英語のスピーチコンテストについては目標はよいが、実施上の課題があり、具体的方策を練る必要がある。 ○生徒の基礎学力向上のための授業改善を進める必要がある。 ○今年度から取り組み始めた英語科の改変の成果を来年に期待したい。 ○嵐山生は待っている生徒が多いという点について、無理にでも勉強する環境を作る必要があるのではないかと。
3	＊世界につながる心と感性を育てる ○校訓を生かした指導の充実が必要 ○校内での挨拶指導のためのルールの徹底や通学路やスクールバス内での挨拶マナーの向上が必要。	○自律心と自主性に富んだ人間性の育成 ○他者と協働できる社会性を持った生徒の育成	○全教職員による挨拶の励行、身だしなみ指導、時間厳守指導を行う。 ○「礼儀作法」による礼法指導を行う。 ○大妻コタカ先生の言行録による道徳教育を実施するとともに、論語の素読によるさらに深層の人格形成を目指す ○生徒会・学校行事の活性化。	○他を思いやる心が育って、生徒が穏やかな生活を送っているか。 ○校内外での挨拶が日常的にできるようになっているか。 ○生徒会活動・学校行事が活性化できたか。	○生徒会執行部による大妻付属他校との合同活動を行うなど、生徒たちが積極的に付属校の生徒としての社会貢献の方向性を意識し始めた。このことは生涯にわたる社会貢献の意欲へ繋がり、今の自分を見つめ直す機会となった。 ○全職員の大妻コタカ先生の言行録による生徒への深い愛情に基づいた深層の人格形成への取り組みをさらに充実させる必要がある。	B	○本校でのグローバル化では「自分以外の人々に心を開く、自分たち以外の文化に心を開くことのできる力を持った生徒を育成すること」を目指している。今年度の具体的方策を確実に実施するとともに、論語、大妻コタカ先生の教えについての教育を教育活動のあらゆる場面で展開するための仕組みを確立する。	○生徒会の連携はたいへんよい。職員レベルの連携まで進めていくことができるとよい。 ○多様化社会では、自分らしく生きることが重要となる。 ○生徒会役員の交流は嵐山の生徒たちの視野を広げる意味でも素晴らしいと思う。 ○論語教育について内外にもっとアピールをすべきである。
4	＊世界につながる進学力を育てる ○進路に対する意識の醸成をさらにすすめる必要がある ○キャリア教育の系統的实施をすすめる必要がある	○社会貢献への意識の醸成度 ○系統的なキャリア教育	○大学教授・地域の専門家の授業・講演会の実施 ○総合的な学習の時間を活用して系統的なキャリア教育を実施する。 ○進路指導部のリーダーシップによるきめ細かな進路指導の継続 ○大学入試問題研究冊子の作成。 ○生徒面談を充実し、受験意欲を喚起し続ける。 ○進路の手引き作成・活用 ○学習の手引き(中学)の作成活用 ○在学中の留学や海外大学進学支援のための仕組みを整備・確立する	○生徒が将来への目的をつくることができたか。 ○進学実績が向上したか。(難関国公立・国立医学部3名、国公立20名以上、早慶上理40名以上、GMARCH50名以上の合格者) ○生徒個人カルテを指導にいかすことができたか。 ○海外留学生、進学者が増加したか	○イベントが主な進路行事となり系統的なキャリア教育計画策定実施までには至っていない。さらに努力する必要がある。 ○海外留学、海外大学の推進の仕組みを作成した。今年度海外留学した生徒4人が帰国し、その成果を他の生徒に伝えることができたが、残念ながら短期留学、研修を除き、来年度長期留学予定はない。	B	○グローバルエコサイエンススクールの実現、社会貢献の意欲の醸成、市民性を十分に備えた人材育成を目指して、本校の進路指導、キャリア教育の方向性を見直しを行う。そのためには今年度設定した具体的方策に加え、他校からの情報収集やアクティブラーニング教育先進取り組み校との交流などにも取り組む。	○大妻系列の他校と進路情報や対策等、海外派遣(留学)等で連携してできないか。他校に学ぶことは必要である。 ○生徒が進学目的を明確にしていける指導が望まれる。 ○高大接続を意識した大学入試改革への対応を検討する必要がある。 ○生徒たちの意識改革のためには、さらなる声掛け、また、厳しさも必要ではないかと。
5	○地域との連携を充実させ、学校への十分な理解を得る必要がある ○明確な特色を打ち出す必要がある ○地域の中学校・塾との連携を深め、信頼関係を強化する必要がある。	○積極的な広報を行い、本校への信頼と理解を得る	○地域の小中学校との連携を様々な形で実施する。 ○塾訪問を質・量の両面から改善する。 ○学校のホームページを改編し、訴求力のある内容にする。 ○適時適切な内容での地域への広報活動を実施(電車広告等) ○バス路線の検討、運営を見直す	○中学50名高校180名の入学者が確保できたか。 ○ホームページリニューアル・発信内容の充実、アクセス数の向上	○中期経営計画の中で学校の今後の方向性を「グローバルエコサイエンススクール」とし、そのコンセプトに従った教育活動の展開を中心に地域への学校情報の提供を行うことができた。またHPの高度化、大量の情報提供により、HPのアクセス数は5月下旬からこれまでの8ヶ月で27万アクセスを超え昨年度までの3倍以上となっている。 ○学校説明会への参加者は前年度の2倍を超え、高校募集では出願者数も1.5倍となった。さらに乗車人員の増減に伴うバス路線の見直し、学習塾との連携の再構築、地域小中学校等との連携も進んだ。	A	○今年度は入試広報体制の見直しを図り、全職員が協力して広報活動、募集活動を展開したので、生徒募集での一定の成果が上がった。しかしさらに募集体制を充実し目標の100%達成を目指す必要がある。来年度、事務室を含めた募集体制をさらに充実・整備するとともに、今年度設定した具体的方策を確実に実施し教職員・生徒の学校への帰属意識を高め、教育内容を充実する。	○生徒募集の努力の成果が表れたことはすばらしい。さらに近隣地域の生徒の確保に期待したい。 ○少子化及び経済的な日本の状況などの背景の中で、どのように入試を行うかが課題。特色の広報やロールモデルの提示が1つのやり方になりえると思われる。 ○今年度の生徒募集の成果を、来年度はより一層確実なものにすべく、教職員全員が問題意識を共有して取り組んでいただきたい。 ○来年度に向けて、保護者の目につく所(スーパーなど)にも働きかけて、ポスター掲示の数を増やしてはどうか。